

在韓日本語母語話者の日韓コード・スイッチング

- 機能面を中心に -

松樹亮子*

(e-mail : ryoxon@naver.com)

<目次>

- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 42.臨場感を持たせる |
| 2. 先行研究 | 43.自身の立場や感情の表現、独話的な発話 |
| 3. 研究方法 | 44.互いの連帯感を高める |
| 4. 結果および考察 | 45.ことば遊びをする |
| 4.1.文脈を明確にする-語彙的制約、強調、意味の補填 | 5. まとめと今後の課題 |

キーワード：コード・スイッチング(Code-switching)、日本語母語話者(Japanese native speaker)、日韓二言語話者(Japanese-Korean bilingual speaker)、談話機能(Discourse Function)、自由会話(Free Conversation)

1. はじめに

世界的に人々の移動が流動的になりつつある現代において、複数の言語を使用する人々の存在が意識されるようになり、マイノリティコミュニティの第一言語と第二言語使用やバイリンガル子女に関する研究が進んでいる。このような流れの中で、単一民族による単一言語国家であるという考えの強かった日本や韓国の言語観は変化の必要に迫られているといえる。

自身の第一言語が生活言語ではない土地に居住する者が、第二言語や第三言語を使用して生活をする環境は言語的にはマイノリティとしての生活を

* 高麗大学 中日語文学科 博士課程, 日本語学

送っているといえよう。韓国で生活する日本語母語話者もこれに該当する。彼らにとって、現地語である韓国語が通常、生活言語である。彼らが母語を使用するのは、日本語が分かる韓国人との会話であったり、自身同様韓国で生活する日本語母語話者との会話であったりする。しかし、このような時、日本語での会話が交されているにも関わらず、彼らの会話にはしばしば韓国語が登場していることに気づく。一つの文章や談話の中で、一方の言語から他方の言語に言語が切り替わる現象は“コード・スイッチング”と呼ばれ、バイリンガル研究の分野において注目されてきた。

本稿は、韓国語を生活言語とする日本語母語話者を対象として、このコード・スイッチングの現象がどのような場面で現れるのかということ考察するものである。あくまで発話のベースとなるのは日本語であり、母語でのコミュニケーションが可能である環境で韓国語をあえて使用する場合、このような発話スタイルがどのような意味を持ちうるのかということ論じることで、韓国語への切り替えが持つ談話上の機能を明らかにしたい。

2. 先行研究

Gumperz(1982/2004:73-111)は、バイリンガル話者がバイリンガルな状況において「もう一つの言語を使ってコミュニケーションできるという意識」は言葉を発するうえでの資源(resource)になることを指摘している。そのうえで、話者が発話中にコード・スイッチングを行うことはコミュニケーションにおいて、さまざまな意味や効果を持たせるための言語使用であるとしている。つまり、言語を交替させて伝えられたメッセージには、何らかの隠された発話意図や談話上の効果があると考えられる。

コード・スイッチングが持つ機能に関する研究は、都恩珍(2000)、李尚美(2009)、宮原(2011)などがあるが、これらを見ると、複数言語を切り替えながら発話するという自体に、話者が利便性や何らかの効果を期待しているということが分かる。

在日コリアンの3世の発話内でのコードの切り替えを調査した都恩珍(2000)は、対象者の会話について日本語を母体とする発話、韓国語を母体とする発話、両言語がミックスされる発話の3つのパターンがみられることを明らかにした。その中で日本語を基盤とした発話については語彙レベルでは韓国の文化的経験についての語彙や、メンバーシップの確立のための語彙、民族意識や生活文化と密接な関係にある語彙が韓国語に切り替わっており、これが心理的な距離感を縮め、彼らが互いに民族アイデンティティを確認しあっている

ことを指摘した。また、韓国語と日本語が混用される場合としては、アイデンティティの表明や、対人関係の維持、言語意識の喚起、話題転換のマーキング、文体的な効果を与えるための引用などがあると述べた。

李尚美(2009)は、日本に長期間滞在し日韓両言語のバイリンガル話者(大学生、大学院生、会社員)を対象に、日韓両言語のすべてを理解できる話者が二言語を併用することには何らかの目的があると仮定し、彼らのコード・スイッチングの談話機能について分析している。その結果、副詞の切り替えや二言語の繰り返しの使用(ダブルシグナル)による強調機能、オノマトペの切り替えにより臨場感を付与する機能、談話調整機能<フィルター、付加的な切り換え>、接続表現の切り替えによる発話権獲得のための機能、引用切り替えによる境界の提示機能の5つの機能があることを述べている。そのうえで、コード・スイッチングが有標的な選択であり、言語の併用は話者にとって自身がバイリンガル話者であるということを積極的に表出するための行為であると指摘した。

また、日本語と英語のバイリンガル大学生の発話に見られるコード・スイッチングの機能について調査したものに、宮原(2011)がある。宮原(2011)は、バイリンガル話者どうがコミュニケーションするうえで、相手に伝えたい内容を、瞬時に、最も適切に表現する手段としてコード・スイッチングが選択されているとの見解を述べている。コード・スイッチングの機能としては、構成に関する機能、意味に関する機能、相互作用機能、文体的効果機能、言語習得に関する機能、若者意識共有の機能、ことば遊びの機能、CS(コード・スイッチング)使用合図の機能の8つの機能があるとしている。これに加え、ディスカッションを通じてインフォーマント自身がコード・スイッチングをどう捉えているのかについても調査している。その結果、話者がコード・スイッチングに対して抵抗の意識やジレンマを持っている場合があること、そのような意識があっても実際はコード・スイッチングをしていること、コード・スイッチングが会話の促進や明確化、強調を容易にすること、コード・スイッチングすることでさらなるコード・スイッチングが促されること、コード・スイッチングが自身のアイデンティティを表現するための手段であることを明らかにした。

多言語話者のコード・スイッチングの機能に関するこれまでの研究を概観すると、会話場面においてコードを切り替えることは、話者自身がアイデンティティを確認することを大きな軸として、強調したり、文体的な効果を与えたり、文の構成に影響を与えるなどの機能があることが指摘されてきた。話者がバイリンガル環境を想定し、異なる言語を使用することが可能になるゆえに、ある言語から別の言語へと交替させるという点を利用して話者が特別な意味を付加していると考えられる。

ここで、韓国に在住し、母語と第二言語との多重言語環境にある日本語母語話者が、同じ環境にある友人と日本語で会話する場面においても同様の機能が見られることが想定できる。松樹(2018)では、韓国に居住する日本語母語話者が、日本語ベースの会話のなかで、さまざまな形式の韓国語に切り替えながら会話を行っていることを報告しているが、この韓国語への切り替えは理由なく行われているのではなく、彼らにとって何らかの役割を持っていると考えるのが自然である。

3. 研究方法

本稿では、在韓の日本語母語話者の言語使用のうち、ベースとなる日本語の使用のなかで、韓国語に切り替わって行われる発話について考察を行う。コード・スイッチングが現れた発話のみを抽出し、その切り替えが文脈や会話のなかでどのような機能を持つのかということを実際の例をもとに分析した。研究対象者は韓国で一定期間生活していることを前提とし、学習者としてではなく韓国語を生活言語として日常的に使用する二重言語話者として捉えるものとする。松樹(2018:5)では、第二言語(韓国語)を学習によって習得した者について、複数言語を母語同然に駆使するようなバイリンガル話者とは区別されるとしつつも、母語と異なる言語で発話を完結し有意義な発話の生産が可能になる時点をバイリンガル研究の出発点であるとする山本(1991)の見解を引用し、実生活で第二言語を生活言語として使用する日本語母語話者も、バイリンガル話者(二重言語話者)といえと捉えているが、本稿でもこの立場を踏襲する。なお、二言語を混合して発話する現象に対しては、研究者によって用語の使用に違いが見られるが、本稿では、話者が母語環境で母語のみを使用せず、第二言語や第三言語に切り替えて話しているというその現象自体にどのような意味があるのか着目し、この現象をすべてコード・スイッチングと呼ぶことにする。分析には、日本語母語話者2名による対面での自由会話のデータを使用する。自由会話データは、10組20名の友人関係にある日本語母語話者によるそれぞれ30分以上の会話であり、対象者は、婚姻や進学、就業を目的に自発的に訪韓し、録音時に韓国での居住があることを条件とした(表1)。

＜表1 研究対象者の情報および会話時間＞

資料番号	No	話者	年齢	性別	職業	在留期間	会話時間(分)
A	1	A1	39	女	主婦	13年	33.21
	2	A2	34	女	主婦	9年	
B	3	B1	31	女	学生/主婦	5年	35.59
	4	B2	29	女	学生/主婦	6年2ヶ月	
C	5	C1	34	女	学生/日本語講師	3年	33.56
	6	C2	27	女	主婦	3年5ヶ月	
D	7	D1* ¹⁾	54	女	ゲストハウス経営	3年3ヶ月	35.19
	8	D2	51	女	主婦/占い通訳	21年	
E	9	E1	24	女	学生	1年8ヶ月	45.56
	10	E2	34	女	学生/主婦	3年	
F	11	F1	29	女	日本語講師	7年	45.59
	12	F2	30	男	学生	4年	
G	13	G1	28	女	語学留学生	11ヶ月	36.09
	14	G2	19	女	語学留学生	11ヶ月	
H	15	H1	43	女	セラピスト	2年	38.36
	16	H2	36	女	フリーター	7年	
I	17	I1	29	男	美容師(駐在)	3年	32.16
	18	I2	29	男	公務員(駐在)	1年2ヶ月	
J	19	J1	22	女	大学生	3年	33.58
	20	J2	24	女	大学生	5年	

なお、性別や年齢、職業といった属性は、話者の言語使用環境を左右するものと考えられる。しかし、日韓コード・スイッチングに関する先行研究のうち、日本語を母語とした話者を取り扱った研究は大変少ないため、まずは全体の傾向を捉えることを目的とし属性に関する細かい条件の設定は行わず資料収集を実施した。

4. 結果および考察

ここからは、日本語をベースとする会話や文章の中で韓国語がどのように使用されているのか、すなわち、コード・スイッチングがどのような場面で現れるのかについて分析し、韓国語へのコード・スイッチングが果たす機能について考察したい。

1) *は在日韓国人の対象者である。対象者D2は、日本で生まれ育ち、韓国語の家庭内での使用がほとんどなかった。また、韓国語は韓国に来てから学習によって習得しているため、言語の使用面においては、他の対象者とはほとんど差がないと判断し、研究の対象から除外しなかった。

4.1. 文脈を明確にする – 語彙的制約、強調、意味の補填

名詞や形容詞、動詞など、文章中の一部を切り替えることによって、韓国特有の概念であることを示したり、強調させたりするために韓国語へ切り替えているようなケースである。

【例1】韓国の不動産文化に特有の語彙について韓国語を使用する例

D1: だから私はそれを聞いてたからー、あ絶対に一전세……
 D2: 自分の、월세でしたの？
 D1: うん、월세で家を借りてリモデリングしたらー
 D2: うんうんうん

【例2】韓国の文化生活に関する語彙について切り替わっている例

A1: だからどうせなら休みのほうがいいよねとかいって
 A2: ふーん
 A1: 夏休みとか？うーん。
 A2: へー
 A1: か추석か連休のとき？

【例1】は、日本には存在しない韓国独特の不動産の契約形態である「월세／전세」という契約方法について互いの情報を交換している場面である。このように韓国での生活に密着した語については韓国語で話されることに違和感がないようであり、あえて日本語にすることのほうがかえって会話の進行を妨げたり、話の内容が不明確になってしまうと考えられる。また、【例2】の場合も同様で、韓国の名節の一つと言われる「추석」は、漢字で書くと「中秋」となり日本語では旧盆に該当するが、通常韓国の「추석」には韓国の文化的作法に則って進められる家庭内の儀式があり、期間中は祝日となる。そのため、日本の盆の行事とは異質のものであり、話者も、日本にある概念にあえて当てはめることなく、韓国の「추석」であることを確実に伝えようとしているのである。

同様に、韓国の文化的側面を反映していると見えるものに、親族呼称のコード・スイッチングが挙げられる。林(2001)は、呼称について日本語と韓国語ではその使い分けに相違が見られることを指摘しているが、親族の呼称は特に日本語で表現できるものに比べ、母方か父方かや男性か女性かなど、呼称がより豊富に存在する韓国語を使用することが、ある人物を特定するのに役立つようである。以下はその例である。

【例 3】親族呼称が切り替わっている例

B1:	でたまに一、その、 <u>김서방</u> 。 <u>김서방</u> って呼ばれてんだけど。
B2:	あーあー
	《中略》
B2:	あ、でもちゃんと返事はしてんだね。でちょっとまあ。ははは、あそうなんだ、ほんとに全体だね。 <u>김서방</u> まで。
B1:	<u>김서방</u> まで。

【例 3】では、女性側の家族側から見た婿を呼ぶ「～서방」という部分が韓国語になっている。実際にB1の家族の中で呼ばれている呼称をそのまま使用し、発話している様子が見て取れる。そのすぐ後に、「김서방って呼ばれてんだけど。」とB1がB2に説明をしているが、B2も、すぐに合点がいったというような相づちで反応しており、その後何度か同じようにこの呼称を出してB1の義理の妹の夫について話している。最後には、B2もその人のことを「김서방」と呼び、特定の韓国人の人物であることを、韓国語の呼称を通じてB1とB2二人が共有している。ここから、韓国人の親族である特定の人物を表しながら発話することで、内容を正確にすることに役立っているということが分かる。

【例 1】～【例 3】のような例の多くは、全体の文章の中で、ある単語だけが韓国語で発話され、韓国語を使わざるを得ないような場面であると思われる。このような例について、特に会話相手が聞き取れずに聞き返すという行動はほとんど見られず、韓国語を埋め込んで使用されることに違和感を覚えていないようだった。つまり、普段からこのような発話スタイルで会話が開示されていることが予想できる。実際に、録音の際、話者に「どのような時に韓国語を混ぜて使用するか？」という聞きとりを行うなかで、ベースとなる日本語では伝達が難しいと感じる韓国文化と関連するような語彙などは、あえて日本語で説明することなく、よりダイレクトに意味伝達が期待できる韓国語を使用する、といった回答が見られた。松樹(2018:16)でも指摘されるように、地名や文化に関連する語に関しては、ある程度韓国語を選択せざるを得ない場合があるためであり、滞留期間が比較的短い対象者によく見られる食べ物に関する語彙のコード・スイッチングなどもこれに該当すると考えられる(松樹 2018:17)。

また、同一の意味を持つ単語や表現が二つの言語で繰り返されるという現象が確認できた。両言語で同じ意味を持つ語が繰り返される現象について、韓国語を母語とした話者のコード・スイッチングに関する先行研究(都 2000,2001; 李 2009)ではダブルシグナルと呼び、在日コリアンと韓国語ネイティブ話者へのそれぞれにシグナルを送るための使用(都 2000)や、強調のための使用(李 2009) が指摘されている。

本稿の調査では、語の反復は、両言語を直後に繰り返す場合もあれば、一方の言語で発話した後に少し時間をおいてもう一方の言語が現れる例も見られた。繰り返される語彙は、【例1】～【例3】のような韓国文化に特有のものを表す語彙的制限を受けるものというよりは、一般的な語であるケースが多かった。

【例4】日本語と類似の意味を持つ語が韓国語で直後に繰り返される例

A2: でまた今週からはさ、放課後、방과후、英語やってるから、一回家に帰ってきてまた英語に行く
A1: あ、そうなんだ。んー

【例5】同一の意味を持つ語が時間差で繰り返される例

F1: 日本だとさ一学割あるじゃん대학원생も
F2: 例えば？
F1: 院生も一交通費とか。

【例4】では、この時に「방과후」という語を反復使用した理由について、A1に対し事後インタビューで確認したところ、韓国語の「방과후」が日本語の「放課後」とは少し違うものと捉えており、日本語の中に当てはまる語がない、という発言をしていた。そして、A1は、特に韓国の小学校で有料で行われる「방과후 활동」あるいは「방과후 프로그램」と呼ばれるものについて話そうとして韓国語で続けて発話したということが分かった。このように、日本語の語彙の中に同じ漢字の組み合わせによる該当する語があっても、日本語と韓国語で概念が少し異なるケースなどがあり、そのような場合にも切り替えが起こっているようだ。二つの言語で反復することで、より聞き手に正確に伝わるように意識的に語を二つの言語で発したと考えられる。また、【例5】は、F1が韓国語で学割について「대학원생（大学院生）」という部分だけ韓国語に切り替わり、次のF2の「例えば？」という質問に対して同一の意味を持つ「院生」という日本語で受け答えをしている。F1も、事後のインタビューで、自身が韓国に来てから多く使用するようになった語（‘석사（修士）’、‘박사（博士）’などの大学院に関連する語彙を挙げている）は、普段韓国語でそのまま発話しているようだとして自身の言語選択について振り返っている。このように、話者にとってある特定の語彙については、日本語よりも韓国語で発話するほうが慣れていることがある。この点から、反復は単に強調ということだけでなく、話者にとってより身近な語彙である韓国語で発話した後に、聞き手を考慮

して日本語で再度発話したり、会話の内容に合わせて日本語で同一の意味を持つものを発話したり、といった一種の調整行動のようなものである可能性もある。事実、【例5】は“日本の”大学院生の交通機関の割引などについての発話であり、また、F2の質問を受けての受け答えであることから、会話相手への伝わりやすさを重視し日本語で発話しなおしたような印象を受ける。このように繰り返しによるコード・スイッチングは、聞き手が理解しやすいように行われる話者による配慮という側面も持ち合わせていると思われる。

加えて、意味の強調や補完に関わるコード・スイッチングとして、そこまで話されていた内容を言い換えたり、情報を整理・追加するなど、より内容が伝わりやすいように意味を補うような例が見られる。

【例6】韓国語で言い換えられている例

B2:なんか、ねえ、家の中でいじられキャラなの？
B1:全然全然全然。
 《中略》
B2:お兄ちゃんが？
B1:そう
B2:へー
B1:そういうキャラにしたてあげてはいけぬ、いけぬ、みたいな
B2:いけぬ、みたいな、あはは、なるほどね
B1:けっこう扱いにくいよ、かたろ、까다롭다って感じ

上記の【例6】では、B1が自身の兄の性格について説明している場面で、どのような性格かということ日本語で述べた後、「까다롭다」という韓国語の形容詞で内容を整理し総括しているような印象を受ける。あるいは、そこまで述べていた兄の性格について、韓国語の単語でさらに分かりやすくするために説明を補完しているようにも見える。聞き手であり、B1の兄を知り得ないB2に対し、より適切により分かりやすく、内容を伝えようとする話者B1の意図が感じられる。

以上のように、ある語彙が韓国文化と深く関連したものであるために語彙的制約を受ける際や、文脈的に日本語と一緒に韓国語を用いることで聞き手に配慮する際、また、内容を統括したり、語彙の意味を互いに補完したりする際にコード・スイッチングが見られることが分かった。このような切り替えについて、宮原(2011:244)では、「意味に関する機能」とし

て基盤言語での伝達が困難なもの、文化を喚起・想起させるもの、強調の意味の増幅であると指摘している。今回の調査では、そのような語彙面での意味上の制約や強調による使用だけではなく、韓国語の使用が内容を補完する役割を持つという点で、話者が第二言語である韓国語をツールとして積極的に活用していることを表していることが分かった。

4.2. 臨場感を持たせる

他者の発話や自身が過去に行った発話、またある場面で想定される発話について、その場面だけをきりとして引用をしながら韓国語で発話するようなケースが見られる。実際の状況について引用形式を用いて、韓国語で再現することにより、韓国語で発話されたその状況を聞き手により豊かに想像させ、まるでその場を実際に見ているような臨場感を持たせる効果を持っているものと思われる。これらは引用節として出現し、文章の一部分のみを韓国語に切り替えて挿し込ませることで、文体的効果を期待しているものと見える。

【例7】自身の韓国語発話を直接引用し再現する例

H1: その、大丈夫だよ、って
 H2: うん
 H1: ●●²⁾さんが言ってくれて
 H2: うん
 H1: そんな時にあたしが、あの、とっさに 「 지켜주세요, ●● 지켜주세요 」
 ってゆったんやんか

【例8】他者の韓国語発話を直接引用し再現する例

C1: あの、お父さんに韓国語で話しかけられたって言ったっけ？
 C2: あ、そうなんですか？
 C1: うん。なんか、みんな、は結婚してるの？って言われたから、あ、いや、まだです、って言ったら 「 꼭 기회가 올 거예요 」とか言われてー。
 はっはっは。

【例7】は、H1自身が韓国人に対して韓国語で発話したものを再現して述べている場面である。その部分を韓国語で再現することで、会話相手を自身の発話に引き込み、H1が体験したことをさらに臨場感をもって伝えている。【例8】ではC1がC2の父（日本人）が自分に対し韓国語で話しかけてきたエピソードについて話している場面で、日本人同士であるにも関わらず韓国語で話しかけられたことに対する滑稽さについて、その場面をそのま

2) 個人の名前が出現した場合、すべて「●●」と記した。

ま韓国語で引用発話することで再現している。この他に、ある場面において想定される誰かの発話を、韓国語に切り替えて発話するようなケースも見られた。いずれの場合も、ある発話をまるごと韓国語で発話し、ある場面での誰かの発話をまるでそこに居合わせているような感覚で伝えようとしている。

イギリスに住む日本人のコード・スイッチングを調査した藤村(2013)は、自身の周りで起こった出来事を説明する際に、第三者に言われたことや英語のネイティブとの会話で行われた発話は、日本語に訳さずそのまま英語で発話する傾向があることについて指摘している。さらにこれまでの研究から、引用の表現がコード・スイッチングされることは、文体上の効果を狙ったものとして、さまざまな言語において同様の現象が明らかにされてきた (Gumperz 1982/2004; 都 2001; 宮原 2011; 郭 2012)。本稿の対象者においても他者や自身が行った発話や、ある限定的な場面で誰かが発話しそうなことに對してそれを引用する際、日本語にすることなく韓国語で発話されており、これらは単に引用するだけではなく会話や発話が行われた際のその場を聞き手が想像しやすいように、会話に臨場感を与えるような機能を担っていると考えられる³⁾。

4.3. 自身の立場や感情の表現、独話的な発話

話者たちは、自身の考えや感情・心情に関する発話を行う場合に韓国語への切り替えを行っている。今回の会話資料の中では、何かを思い出そうとしている場面や、思い出した事柄について思いついたように韓国語で発話する場面が見られ、韓国語での発話があくまで話者の独話であるということを示すような箇所での使用が見られる。また、韓国語の感嘆詞を用いて、自身の感嘆の気持ちを表す発話での切り替えも確認でき、主観的な感情や気分を表すために韓国語に切り替えて発話することがあるようだ。つまり、自身の考えを独話的に述べたり、それまでの会話を受けて自身の感想を吐露するという、事実に関する陳述と個人的な意見や感想とを区別するための境界が示される場合であることが分かる⁴⁾。つまり、話者が主観的な考えや感情について表現しようとするとき、コード・スイッチングがそれまでの説明や陳述とは区別されるということを示す役割を担っていると考えられる。

³⁾ 李(2009:78-79)では、臨場感の付与としてオノマトペの使用を報告しているが、今回の調査ではそのような例は見られなかった。

⁴⁾ 宮原(2011:243)では「構成に関する機能」として、客観的事実の陳述と主観的意見の陳述の区分をより明確にするコード・スイッチングがあると述べられている。また李(2009:79-80)では、談話調整のための機能として、フィラーの切り替えや客観的事実と個人意見の境界を示すものがあると報告されている。

【例9】何かを思い出そうとして独話的に韓国語が発話された例

F2: 知らない情報ってこと?
 F1: そう、あたしが知らない情報を・・・なんだっけ。
나 뭘까... 아~
 F2: ていうことはそれは日本語の
 F1: 원서
 F2: 食べたじゃないですかって言うのと似た表現ってということ?

【例10】韓国語の感嘆詞で発話された例

J2: かわいらしいね。わたしもよくやるもん。寝ぼけて●●に変なの送ったり。
 J1: え、いいやん、まじもう。
 J2: やーもう。
 J1: 아이고야~
 J2: 아이고야~
 Mさんの話する?

上記の【例9】は、F1が思い出せない事柄について、独話的に韓国語が発話されたものであり、F2が話している内容への応答という形ではなく、頭の中で考えていることをそのまま韓国語で話しているような発話だ。F2が、F1の発話に対し特にそれを気にとめず会話が進んでいくことから、F2もF1の韓国語発話を独話であると捉えていると見ることができる。【例10】は、韓国語の感嘆詞「아이고」を使用し、J1が自身の感嘆の気持を述べた例であり、それに触発されたようにJ2も続けて同じ感嘆詞を使用して発話している。その次の発話で、J2が「Mさんの話する？」と、別の話を持ち出しており、韓国語での感嘆詞の発話を期にそれまでの話題が終わり、次の話題へと移っていていることが分かる。

この例のようにある場面で自身の感想や気分を韓国語で発話する例は、筆者も韓国での生活の中で耳にすることがあり、“現状がづらい”ということを独話的に発する場面（“아이고”、“아, 힘들어”など）や、期待していた以上のことが起こったり、状況が好転した場面（“잘됐네”など）で韓国語へのコード・スイッチングを目の当たりにする。こういった発話は、話者にとって口癖のようなものになっている可能性もあるが、独話の際、あるいは話者の心情が表される際に使用され、【例10】のように話題の切れ目で使用されることがあることから、談話マーカー的な役割を担っていると言えるだろう。

4.4. 互いの連帯感を高める

韓流アイドルなどに興味があるという共通点を持つ話者同士の会話で自分の好きなアイドルなどについて話す場合、あるいは、韓国人配偶者を持つ者同士の会話の中で家族のことを

話す場合などに、韓国語への切り替えが見られる。これらは、当該話題に関連する語彙や表現のコード・スイッチングが、同一のコミュニティに所属しているということや、同様の境遇に生活しているということに対して、互いの連帯感を高める効果をもたらすものと考えられる。

【例11】 特定のアイドルが好きであることを表した例

H1: なんか、んでやっかいやし、そういう人たちってしつこいんやんか。
 H2: あそう。まー困ったねえ。んー。
 H1: んで、その人は特に、●●뽀でやきもち焼いてみたい。
 H2: あーそうなんや。

【例11】の話者であるH1、H2はともにいわゆる韓流文化（アイドル、K-POP、俳優）などへの関心が高く、二人の会話の中では、韓流文化について触れられている場面が多く観察できた。ファンであることを示す「뽀」の部分だけが韓国語になっているが、これは一般的にK-popが好きな人々などの間で広がっている呼び方のようで、日本語で「○○ペン」などと記すこともあるようだ。H1は特に、同様の切り替えが頻繁に見られる。このような使用は、話者同士が韓流文化への興味・関心の高さを表しているだけでなく、話者にとって韓流文化に親しむ人々のコミュニティへの帰属意識の現れのようなものであると考えられる。

また、4.1.で示した【例3】のように、韓国人と婚姻をした場合に、配偶者側（韓国人）の家族を韓国語の呼称を使用して表すケースでは、ある特定の「誰か」を浮かび上げさせるだけでなく、結婚移民者同士の会話においては、互いの家族関係を意識したり、同様の環境に置かれているということを意識するのに十分な役割を持ちうると思われる。このようなコード・スイッチングは婚姻のため韓国に滞在する話者に特によく観察されたが、その理由は、同様の境遇におかれている話者との家族関係や家族文化におけるバックグラウンドの共有がなされるためであろう。彼らは、特に家族関係において、韓国文化への帰属や受容が促されると考えられ、同環境に身を置き生活している者同士がその話題において共感を覚え連帯感を高めるのにコード・スイッチングが役立っているといえるのではないだろうか。

この他に、チャットツールの使用について、グループチャットルームのことを韓国語の「방(" 채팅방:グループチャット" を省略した形式)」と表現し、「방作ったら。(I2による発話)」などという発話も見られた。韓国のチャットツールを使用してチャットを行うことから、韓国語の表現をそのまま発話しているが、こういった表現自体は、韓国のチャットツールを利用した者でない限り、使用することも理解することも困難であろう。

米川(2009:8)は、「特定の機能的社会集団（血縁的・地縁的ではない）に特有

な、あるいは特徴的な仲間内の通用語のこと」を「集団語」と定義しているが、韓国在住者の中で、特に共通の趣味や似たような背景をもった集団で使われる語や表現も、ある種の集団語と考えられ、これらの使用は、その語を知らない者にとってはコミュニケーションを滞らせる原因となるものと捉えられる。つまり、話者が聞き手に対し同質感をもたせようとする働きかけであり、その語を知っている者たちが自分達を同志であると捉える連帯感の醸成に役立つものと考えられる。

4.5.ことば遊びをする

日本語と韓国語の両方を利用して、両言語のそれぞれの意味や音と関連づけてその語感を楽しみながら発話し、ことば遊びをするようなコード・スイッチングが見られた。宮原(2011:248)は、コード・スイッチングによることば遊びについて、ことばの音・リズム・意味などを利用して、コード・スイッチングなしでは実現できなかったことば遊びを成立させるものであると述べている。日本語と韓国語でことば遊びをするためには、両言語の熟達度が高く、使いこなすことができることが前提となるため、言語操作の面からするとそれほど単純なものではないと言える。そのせいか、ことば遊びをしている例はそれほど多くは見られなかった。

【例12】日本語のイントネーションの違いと韓国語を利用してことば遊びをする例

B2:	たぶん家の中では、全然、すごい、なんていうの、お父さんがカチョウ {頭高型で発音}⁵)? カチョウ{平板型で発音}みたいな感じなの。
B1:	カチョウ{平板型発音}って
B2:	カチョウ{平板型発音}ってなんか違うか
B1:	カチョウ{頭高型発音}
B2:	カチョウ{平板型発音}?
B1:	なんか 과장님 みたいな
B1,B2:	<二人で笑う>

上記の例は、それぞれの言語の語感と意味を利用してことば遊びをしている例である。この例は、たまたま、日本語の発音が同じである「かちょう」という2つの語彙に対し、そのアクセントの違いについて言及し、韓国語では発音によって区別が可能であることから、B1による「과장님」という韓国語を引き金にそれを共有したB1とB2の笑いを誘ったものと思われる。このような、アクセントや音声ピッチの相違によってことば遊びが可能であることは、韓国語の語彙を理解した上で、日本語の音声的特徴を利用できることが必要である。

⁵) 音の下がり目であるアクセント核がなく、単語の中で下がり目がないものが平板型、単語の最初の拍に下がり目があるものが頭高型である。

この他に、韓国語の語に日本語を混ぜ合わせて一つの動詞のような形式にしてしまう例が見られた。

【例13】 韓国語の動詞部分に日本語の活用語尾を後続させる例

J1: スイカがけっこうきた。
J2: でもゲーとかじゃなかったらだいじよぶ。
J1: ははっ
J2: そんな大丈夫。티가 <u>없</u> 어ない。だいじよぶ。なんの話しようとした？

【例13】は「티가 나다」という韓国語の動詞文の述部「나다」に、日本語の活用語尾を接続させて、韓国語と日本語を組み合わせている。韓国語の語幹と日本語の語尾が組み合わされた形であり、その活用は、日本語動詞の活用に合わせ、発話のベースとなる日本語にうまく埋め込まれている。これらの例は、日本語・韓国語の両言語の語感を使って発話を楽しんでいるように見える。話者たちがいかに両言語を自分のものにし、両言語を混ぜ合わせて発話することをコミュニケーションのツールにしているのかがよく分かる例である。

今回の調査では、互いのバックグラウンドを知る友人同士の関係であり、やはり会話相手も韓国語が可能であるという認識がある程度あるために、ことば遊びが可能になっていると考えられる。また、注目すべき点として、このことば遊びが見られたのは、居住が比較的長い（5年程度～）研究対象者のみであった。韓国語と日本語を組み合わせる操作自体が、韓国語と日本語の両方を使いこなしている必要があることは前述の通りだが、これはそれほど容易ではないと考えられる。つまり、両言語に精通していることが前提であるため、滞在が長い対象者ほど、韓国での生活によって両言語に対する理解や運用が促進されたことが示唆できる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、韓国に在住する日本語母語話者のコード・スイッチングがどのような場面で現れ、どのような効果をもたらしているのかという機能的な特徴を調査した。その結果、話者たちは、内容を際立たせたり意味を補ったりする場合や、臨場感を持たせて発話する場合、独話的な発話や心情を示す場合、話者の帰属意識や連帯感を強化する場合、日韓両言語を使ってその語感を楽しむ場合などにコード・スイッチングを用いていることが分かった。つまり、本稿で対象とした日本語母語話者たちは、会話相手の理解を促進するた

めの文脈補完的な効果であったり、会話相手との話題に共感したり、内容を調整したりしながらコミュニケーションをするためのツールとして韓国語への切り替えを行っているようである。

まず、コード・スイッチングが確認できたのが、韓国語の語彙や文章を使用することで内容を際立たせたり、内容の補完を行う際の切り替えである。会話のベースとなる日本語の中で、ぴったりあてはまるような語彙が見つげにくく、話者が韓国語の語彙のほうが日本語より適切であると感じているような文化的な語彙で頻繁に切り替えが起こる。それだけでなく、日本語と韓国語を連続して繰り返したり、韓国語の語彙で全体の内容を総括、補填するなど、韓国語の使用が文脈を明確にするような役割を担っていることが分かった。また、コード・スイッチングを効果的に使用することで、話者は臨場感を持たせており、特に引用形式を多用して韓国語発話に切り替えていた。加えて、独話をしたり自身の感想や心情を述べるなど、客観的な陳述ではないことを明示するためにも韓国語が使用されていた。これは、直前までの発話、あるいは後続の話題との境界を示す役割をしていると考えられる。そして、あるコミュニティでよく使われる語を韓国語に切り替えることにより、話者が接する韓国文化について会話相手と共感し合ったり、韓国の文化やコンテンツを知っているからこそ使用できる語の選択を通じて、連帯感を高める効果をもたらしていることが示唆された。最後に、音や語の組み合わせでことば遊びをする場合に韓国語への切り替えが見られた。これは、韓国語と日本語の音声要素や構文要素を利用する点から、両言語の理解や運用が十分であることが必要であると考えられ、特に在住が比較的長い対象者のみに見られた点から、在住が長くなることで運用能力が向上したのではないかと予想される。このように、滞在期間は文化や言語の理解や熟達度と関係していると思われるが、今回の調査では対象者の数が少なく断定することが困難であるため、より詳しい調査については今後の課題としたい。

今回の調査を通して言えることとして、日本語母語話者のコード・スイッチングの実態について、話者が日本語から韓国語へコードを切り替える要因には次のようなことが考えられる。まず、話者がある語や文について、日本語での発話より韓国語で表現したほうが正確に伝わると感じている点である。さらに、あえて韓国語を選択し発話することは、韓国の文化的な事柄を共有したり、日本語と韓国語の両方が使える環境にあることを確認し合うことにつながるという点も挙げられる。これらより効果的な韓国語への切り替えは、内容の理解を促進したり、話者間の共感を高めたりすることに役立っていると言えるだろう。

本稿で使用した資料は、限定的であるため、この結果がすなわち日本語母語話者が

行うコード・スイッチングの特徴であるとは言えない。また、今回の調査で、在住が比較的長期に渡る対象者にのみ確認されたコード・スイッチングがあったように、滞在期間や、会話における話者同士の関係性、話者の職業などによる属性によってもコード・スイッチングの出現様相が異なることが予想される。今後は、日本語から韓国語へ切り替えられることが持つことの意味をさらに明らかにするために、対象者の数を増やしデータの拡充を目指すとともに、話者の属性による相違についての調査を行い研究を深めていきたい。

【参考文献】

- 東照二(2011)『社会言語学入門 = Sociolinguistics : 生きた言葉のおもしろさに迫る』 研究社, pp.27-36
- 李尚美(2009)「日韓バイリンガルのコード切り替え-談話ストラテジーとしての機能に注目して」『일본학보』, 78, 한국일본학회, pp.73-83
- 林炫情(2001)「韓国語と日本語の呼称に関する社会言語学的研究 -親族間の上下による使い分けの現状を中心に-」, 『일본학보』, 48, 한국日本学会, pp.61-75
- 井上逸平ほか 訳(2004)『認知と相互行為の社会言語学 ディスコースストラテジー』 松柏社 (Gumperz, J.J.(1982). Discourse strategies. Conversational code switching. Cambridge University Press), pp.73-134
- 郭銀心(2012)「韓日バイリンガルのコード・スイッチングに関する一考察-バイリンガル集団別の形態的特徴を中心に-」『日本語教育研究』, 24, 한국일본어교육학회, pp.159-178
- 国際交流基金(2009)『日本語教授法シリーズ 音声を教える』 ひつじ書房
- 都恩珍(2000)「日本語-韓国語バイリンガルによるコード切り替え : 在日コリアン3 世を通して」『일본학보』, 45, 한국日本学会, pp.19-32
- 都恩珍(2001)「事例研究 : 日本語-韓国語混合文における在日コリアンのコード切り替え」『日本文化学報』, 10, 일본문화학회, pp.71-86
- 中西久実子(2005)「日本語学習者の携帯メールにおける「カタカナ韓国語」へのコードスイッチング」『社会言語科学』, 8-1, 社会言語科学会, pp.132-138
- 藤村香子(2013)「二言語話者の談話における「コードスイッチング」・「コードミキシング」の必要性」『安田女子大学紀要』, 41, pp.23-32
- 松樹亮子(2018)「韓国在住日本語母語話者の日本語会話に現れる韓国語のコード・スイッチング-形式的特徴を中心に-」『일어일문학연구』, 104(1), 한국일문어학회, pp.3-27
- 宮原温子(2011)「日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチング-機能的分析を中心に-」『目白大学 人文学研究』, 7, pp.239-259
- 山本雅代(1991)「バイリンガル-その実像と問題点-」大修館書店, pp.7-9
- 米川明彦(2009)『集団語の研究 上巻』, 東京堂出版, pp.5-27

논문 투고 일자 : 2018. 06. 23.
논문 심사 일자 : 2018. 07. 31.
게재 확정 일자 : 2018. 08. 03.

 <要旨>

 在韓日本語母語話者の日韓コード・スイッチング
 - 機能面を中心に -

松樹亮子

韓国に在住する日本語母語話者同士が日本語で会話する場面で、日本語ベースの会話の中に韓国語の文章や語が使用されるコード・スイッチングの現象がたびたび見られる。本稿は、この現象について、韓国在住の日本語母語話者20名を対象に機能面に着目して考察を行った。

調査対象者が行うコード・スイッチングの機能面での特徴として、まず、話者が発話内容を補ったり強調するために多くの切り替えが起こっていることが分かる。また、引用形式を伴って臨場感を与える機能、客観的な事実と自身の心情や独話を区別するための境界を明示する機能、会話相手と共通話題やそれに関する語彙の使用を通じて連帯感を醸成する機能、韓国語と日本語を組み合わせて発音などで笑いを誘ったりするようなことば遊びの機能が見られた。

全体的に、韓国で生活する日本語母語話者は、母語場面であってもコミュニケーションの手段として韓国語を効果的に使用している。話者がコードを切り替える大きな要因として、ある語や文について、日本語で発話するより韓国語で表現したほうが正確に伝わると感じている点が挙げられる。さらに、あえて韓国語を選択することで、文化的な事柄を共有したり、同一の生活環境にあることを確認し合い、ある話題について話者同士が共感し合うことにも役立っていると言える。

 The function of code-switching in Japanese native speakers residing in
 Korea

Matsuki, Ryoko

Japanese native speakers living in South Korea use both the Korean and Japanese languages in Japanese conversations. This study examined Japanese-Korean code switching, focusing mainly on its functional aspects. The survey was conducted on 20 Japanese native speakers living in South Korea and the analysis was made based on free conversations.

We found that one function of code-switching is emphasis, and this study found that speakers frequently engaged in code-switching when they wanted to elaborate on or emphasize the meaning of what they were saying. We also discovered more functions of code switching: making the conversation seem like it was happening in the presence; making it easier to distinguish objective facts from subjective opinions; and creating a sense of solidarity with other people by using a combination of Korean and Japanese words.

Overall, we found that Japanese people who speak Korean as a foreign language effectively used certain Korean words or phrases in free conversation primarily when they felt it would be more accurate to express a thought in Korean than in Japanese. It also helped to enhance a bond between speakers sharing the same cultural and living conditions.